

大阪商業大学学術情報リポジトリ

「郷土を知り、郷土を愛し、未来を切り拓く力（見方・考え方を働かせる）」を育てる社会科学習の教育実践研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学教職課程委員会 公開日: 2021-05-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小越, 隆寛, OGOSHI, Takahiro メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/991

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「郷土を知り、郷土を愛し、未来を切り拓く力 (見方・考え方を働かせる)」を育てる 社会科学習の教育実践研究

小 越 隆 寛

- I 問題の端緒と研究目的
- II 教育実践の方法
- III 教育実践の成果と課題

I 問題の端緒と研究目的

1 問題の端緒

近年、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会の仕組みや制度は大きく、また急速に変化し、一層将来の予測が困難な時代になると考えられている。このような時代を生きる生徒たちには、「未来を切り拓く力」の育成が求められている。そのためには、社会を生きる主体者として心豊かにたくましく生き抜く力が必要である。たくましく生き抜く力を身につけるためには、自分の考え（意思）をもち、主体的に行動していく力（地域社会にかかわる力）の育成が必要である。自分の考え（意思）をもつには、より説得力のある根拠を構成するとし、その根拠にはさまざまな資料を取捨選択し、よりよい郷土の創造について、自身の想いをまとめていることが必要ではないかと考える。心豊かな生徒を育成するためには、郷土のことを知り、郷土に住む人々の想いを知り、郷土を愛することが必要と考える。ここで、郷土とは自分の生活の基盤となる地域と捉えている。

本研究に関係する教育実践校（以下M中学と表記）は、徳島県の北西部に位置している。東は三好市及び、つるぎ町、南と西は三好市と接しており、本校は、H町の南部に位置している。H町の教育目標「未来を創造し逞しく生きる子どもの育成」を踏まえて、「知育・徳育・体育の調和のとれた教育活動をとおして、自己肯定感・自己有用感を獲得し、目標をもって生きる生徒の育成」をめざしている。平成25年度から「コミュニティ・スクール」も推進し、学校運営協議会を地域の方々と連携しながら生徒の健やかな成長を図っている。

このような学校属性のある本校において、平成30年度においては、第三学年を対象にし、公民的分野の「地方自治」の単元で授業研究を行った。その授業でアンケート調査を実施すると、H町やM中学校のことが好きな生徒が多くを占めていることがわかったが、将来はH町で生活したいと考えている生徒が少ないことも判明した。

学習指導要領（平成29年告示）では、新たに育成を目指す資質・能力として「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力・人間力等」の三つの柱で整理されている。

さらに、これらの三つの柱に基づいて各教科の目標が明記され、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することも述べられている。「深い学び」の実現のための要件として「見方・考え方を働かせること」があると理解できる。「見方・考え方」とは、各教科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方のことである。学習指導要領（平成29年告示）解説によると、「社会的な見方・考え方」は、社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の「視点や方法（考え方）」であると明記されている。公民的分野「現代社会の見方・考え方」の例として、対立と合意、効率と公正、分業と交換、希少性、個人の尊重と法の支配、民主主義、協調、持続可能性にまとめることができる。

自分の考え（意思）をもつことや、主体的に行動していく力（地域社会にかかわる力）、また郷土のことを知り、郷土に住む人々の想いに触れ、郷土を愛する態度の育成は、心豊かにたくましく生き抜く力を身につけることができると考える。そして、生徒たちが社会を生きる主体者として「未来を切り拓く力」の育成につながるのではないかと考える。

2 研究の目的（アンケート調査からみた生徒の実態）

上述したように、平成30年度は、M中学校第3学年の社会科を担当し（第3学年の在籍数は73名。学級数は、3クラス）、4月上旬、社会科アンケートを実施した。

アンケート調査の結果は、将来、「H町で生活したい」と回答したのはわずか22%の生徒にすぎなかった。その理由の多くは、「H町に魅力がない」であった。この結果は、H町のことをあまり知らないから、このような回答になったと推測できる。

その後、本校の教職員にアンケート調査の結果を伝え、原因は何かと話し合いを行った。そこでは「地域の方々とふれ合う機会が少なくなったから」「核家族化が進行しているから」などの意見があった。これをふまえ筆者は、コミュニティ・スクールである本校の特色を生かし、地域の人々と連携しながら社会科授業を構成することを考えた。

II 教育実践の方法

1 地方創生プランの授業実践（見方・考え方を働かせる）

(1) 授業の概要（平成30年度の授業実践）

平成30年度は、公民的分野の地方自治の単元において、M中学校第3学年独自の地方創生プランを作成した。

地方創生とは、具体的に、「しごと」、「ひと」、それを支える「まち」づくりをすることで、良い循環をつくり、活力ある、元気のある地方を創っていかうとすることである。総務省統計局によると、徳島県の人口は、2020年2月現在、約72万6000人である。「県政だよりアワーとくしま」によると2060年の人口は、推定41万人になると予測されている。徳島県では、徳島県の人口を50年後に60万から65万人を目ざすために、地方創生プランを作成している（図1、図2）。徳島県の地方創生プランとは、ひと、しごと、子育て、まちの4つの柱を中心に、人口減少を克服し、新しい徳島県を創っていかうとするプランである。第3学年の生徒は、

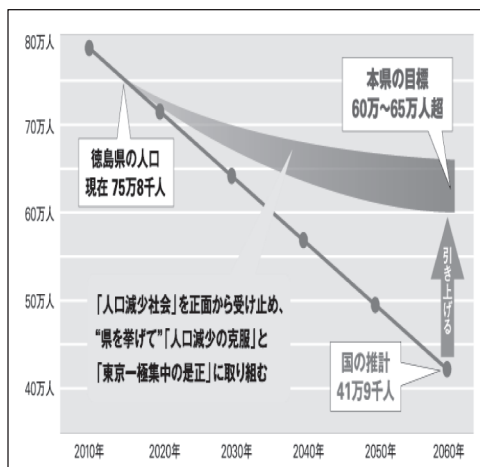


図1 徳島県の人口推移¹⁾

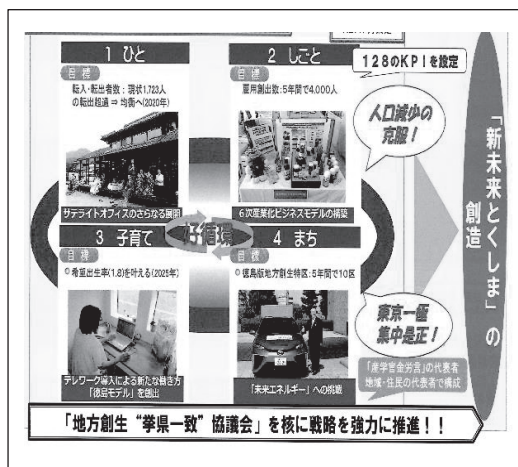


図2 徳島県の地方創生プラン²⁾

授業の一環で、H町の地方創生プランをもとに、各クラス、6班にわかれ、テーマごとに調べ学習を行い、独自のふるさとH町地方創生プランを作成した。

(2) 単元（授業実践）計画

- 第一次 身近な地域の政治（教科書106～107頁）³⁾
- 第二次 地方財政のしくみと住民参加（教科書108～111頁）
- 第三次 変わりゆく地域社会（教科書112～113頁）
- 第四次 地方創生プランの作成（調べ学習）
- 第五次 地方創生プランの作成（まとめ作業）
- 第六次 地方創生プランの作成（クラス内発表）
- 第七次 平成30年度 社会科学習発表会（12月中旬実施）

第一次の単元において社会科学習発表会（第3学年73名が特別教室に集まり、各クラスの社会科係2名が代表して、プレゼンテーション：動画を含む）を実施した。今回の発表会の開催に際して、H町役場の職員と連携し、ぜひ生徒の頑張っている姿を多くの方々に見てもらおうと周知をお願いした。当日は、H町長や教育長、役場の職員の方々に本校に来ていただき、M中学校第3学年が考えたH町地方創生プランを見ていただき、講評もいただいた。

2 授業実践の結果

(1) 肯定的な評価

- ① 生徒の感想に、「H町のことをさらに知ることができた」「H町が一番良い町だといえるように名物を増やしていきたいと思う」「自分の町の問題について考えることができ

1) 徳島県地方創生推進課、加藤貴弘「徳島の地方創生～徳島は宣言する vs東京～」
<https://vs-tokyo.jp/report/docs/%e8%ac%9b%e6%bc%94%e8%b3%87%e6%96%99.pdf>（最終閲覧2020年11月30日）より所収。
 2) 徳島県地方創生推進課、加藤貴弘、同上。
 3) 使用した教科書は『中学社会 公民 ともに生きる』平成29年、教育出版株式会社。

て良かった」があり、H町のことに興味をもつことができた。

- ② H町を活性化させるために、「効率と公正」に着目して、コスト面を考え、全世代が幸せになることができるように具体的に考えることができた。

(2) 今後の課題

- ① H町のことを知ることはできたが、H町の問題について深く考えることはできなかった。
- ② インターネットからの情報のみで、町役場の方々や地域の方々からのヒアリングなどを実施することができず、地域の方々の想いを知ることができなかった。その実施できなかった要因は、ア. 授業時数が不足していたこと、イ. 地域の方々との連携までには至らなかったこと、があげられる。そこで、次年度に向けての改善点として、ア. カリキュラム・マネジメントの見直しと、イ. 地域の方々との連携・情報共有が重要と考えた。

3 平成31年度の地方創生プラン授業実践

(1) 概要

授業実践対象は、在籍数は72名の第3学年で、学級数は3クラスである。昨年度からの改善点としてカリキュラム・マネジメントの見直しと地域の方々との連携・情報共有に取り組むため、H町地域おこし協力隊のK氏に協力を依頼する。そして、公民的分野の地方自治の単元において、これからの地域社会を学習する中で、「6次産業化をプロデュースしよう」⁴⁾に取り組む(各クラス6班にわかれて地域活性化事業に取りくむ)。具体的に、H町で6次産業化を行う4つの事業者所⁵⁾から話を伺い、それをもとに、思考を凝らして創造性を膨らませ、地域ブランドとして販売する「6次産業化」に挑戦した。事業目的は、H町の企業とふれ合い、地域の素晴らしさ、地域の方々の想いに触れ、地方公共団体が抱えている課題と向き合い、主体的に解決策を考えることである。

(2) 授業計画の概略

以下の期日、内容で実施した。

- ① 2019年7月～2020年2月
- ② 出前授業(6次産業化事業者より聞き取りを行う授業展開) 12月6日: 4校時
- ③ 特別授業 地域企業と地域との関わりを、ボーカロイド技術を中心に、H氏より中学生向けの講演会 12月9日
- ④ 調べ学習・まとめ 6次産業化事業者より聞き取りした内容を元に調べ学習したりまとめたりする 12月9日～11日
- ⑤ クラス内発表 グループ分けを行い②で聞き取りした内容を基に⁶⁾、事例を選択。ど

4) 6次産業化とは、一次、二次、三次産業の融合による新しい産業の創出をいう。

5) 4事業者の事業内容は次の通りである。A事業者.芋の栽培、加工、販売、B事業者.民宿、農業(いちご等)、料理体験、自然体験 C事業者.菓子製造卸業 D事業者.民宿、農業体験(傾斜地農法)、料理体験、農家レストラン

6) 各事業者に出前授業形式で参加してもらい(2019年12月6日、4時限目)、一問一答的に、各事業者さんの売り(ウリ)や課題、6次産業化事業に取り組んでいる想い、中学生へのメッセージなどをパワーポイントや実際の商品を提示しながら話してもらう。

のようなアイデアを提案することが良いのかの話し合いの場を持つ。

- ⑥ 選抜メンバー報告会 グループごとに6次産業化アイデアの発表。事業者からも来校していただき、講評をもらう。

(3) 平成31年度教育実践事前アンケート調査の結果（3年生72名、平成31年4月実施）

昨年度の取り組みの反省を踏まえ、今年度はアンケート項目を増やした。その理由は、心豊かにたくましく生き抜く生徒の育成には、H町のことを知るだけでなく、H町の一員としての自覚の有無も関係してくるのではないかと考えたからである。

アンケートの結果から、約75%の子どもたちは、将来、H町で生活したいと思っていないと回答した。その理由の多くは昨年度と同様に、「H町に魅力がない」「あまりH町のことを知らない」であった。また、H町の地域の一員としての自覚の有無についても調査したが、45%の生徒が「自覚がある」と答える一方、「自覚がない」と答える生徒が36%いた。その理由としては「地域に貢献するような活動をあまりしたことがない」などの意見があった。そのため、コミュニティ・スクールである本校だからこそ、本年度はH町のことを知るだけでなく、H町の問題に対して地域の方々とともに、連携して取り組む活動を実施するように準備をすすめた。

(4) 授業実践計画（単元計画・授業内容）

第一次 身近な地域の政治（教科書）⁷⁾

第二次 地方財政のしくみと住民参加（教科書）

第三次 変わりゆく地域社会（教科書）

第四次 6次産業化（事業者ごとの出前授業:総合的な学習の時間）

第五次 6次産業化（調べ学習）PC教室

第六次 6次産業化（まとめ学習）

*ここでは、「対立と合意」に着目して、より良い商品を考案するにあたり、H町の企業の想いや消費者のことを踏まえ、班員と意見を交わした。その際には、「効率と公正」にも着目し、コスト面やどの世代にも通用するような商品アイデアを出していった。

第七次 6次産業化（クラス内発表）

*ここでは、各クラス6班に分かれてまとめ作業を行った。クラス内で発表し、秀逸な発表内容であった2班は、後日の学習発表会で代表として発表することになった。

第八次 6次産業化（社会科学習発表会:総合的な学習の時間）

*ここでは、各クラスの代表2班、合計6班が発表を行った。地域住民も招待し、H町の4事業所の社長を前に商品アイデアをプレゼンした。代表者の発表終了後、4つの事業所の社長から講評をいただき、「こんなにH町のことを真剣に考えてくれてありがとう」「今までにない発想で驚いた」などの生の声（想い）を聞いたことで、H町の地域産業への理解を深めることができたと考える。

7) 第一単元から第三単元まで平成30年度と同様の教科書と同頁。

(5) 第6次産業化授業を通しての生徒の感想 (抜粋・要約)

- ① 商品をつくって町を活気づけるということには、たくさんの人が協力して考えを深め合うことが大切だと感じた。班で考え合った商品をみんなで話し合っただけでよりよくすることは、いろいろな意見が出てきて面白かった。生の声(想い)を聞くことの必要性を改めて知った。
- ② H町は、あまりいいところもないし、活性化とか、無理だと思っていた。けれど、今回の第六次産業化授業を通して、H町の良い所や面白いことを知れて良かった。町のことはあまり好きじゃなかったけど、少し興味を持ったし、活性化させたいと思った。
- ③ 第6次産業化授業を通して、商品開発の本当の大変さを学んだ。商品の構想を練って、できたとしても、それを本物の商品にするまで、これと同じくらい長い時間がかかると思うと、もっと感謝すべきだなと感じた。それから、商品を買うとき、それを開発した人の立場に立って考えてみることも大切だと感じた。それをする事で新しい見方やいつもと違った考え方ができるのではないかと思った。

Ⅲ 教育実践の成果と課題

1 教育実践の成果

- ① H町のことを知るだけでなく、H町が抱えている問題に対して、「対立と合意」に着目しながら、H町の企業の想いや消費者のことを踏まえ、班員と意見を交わすなど、班で協力して主体的に取り組むことができた。
- ② コミュニティ・スクールである本校の特色を生かし、事業所の生の声を聞き、実際に事業所の方々とはふれ合い、地域の方々の温かい想いを実感し、H町の支えになったという生徒の感想があり、H町の一員という自覚が芽生えたと考える。
- ③ 商品開発を通して、一つの商品に多くの分野の方が関わっていることを知り、「効率と公正」に着目しながら、コスト面やどの世代にも通用するような商品アイデアを考案するなど、多種多様な見方・考え方で物事を捉えることができた。

2 今後の課題

二年間にわたり、公民的分野の地方自治の分野において、H町の諸問題を解決しようと現代社会の「見方・考え方を働かせる」をテーマに地域の方々と連携して取り組んだ。その結果、多くの生徒がH町の事業所の声やH町役場の資料、インターネットからの情報を取捨選択し、より良いH町の創造について、自ら進んで参加し、自身の想いをまとめることができた。つまり、自分の考え(意思)をもち、主体的に行動していく力(地域社会にかかわる力)が育成でき、さらに郷土のことを知り、郷土に住む人々と交流する中でその人たちの想いに触れ、郷土を愛することにつながったのではないかと考える。将来自分の生活の基盤となる地域で、心豊かにたくましく生き抜き、未来を切り拓く力を育成できたのではないかと考える。次年度も、コミュニティ・スクールである本校の特色を生かし、地域の方々と連携して、地域活性化事業を継続していきたい。また、他教科との結びつきをさらに強化して、社会的な見方・

考え方を働かせた社会科の授業を展開していきたいと考える。いずれにしても、この授業実践で得た生徒や地域社会の人々からの感想や意見等を蓄積していくことが、本研究課題の「見方、考え方を働かせること」の要点の理解、向上につながると考える。

参考文献

1. 栗原久「社会的な見方・考え方を成長させる学習課題の切り口」『社会科教育』明治図書、2017年5月号、16-17頁。
2. 徳島県中学校教育研究会社会部会編「第32回徳島県中学校社会科教育研究大会要項（徳島大会）」令和元年。
3. 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』東洋館出版、平成30年。

